

文徵明の石湖図—上海博物館蔵《石湖花游曲詩画卷》をめぐる—

都甲さやか（九州大学大学院）

石湖は、蘇州の西南に位置する太湖の一支湾であり、古来より文人墨客が遊んだ景勝地である。石湖の名は、石湖居士とした南宋の范成大「四時田園雜興詩」によりその名をひろく知られるようになり、元においても楊維禎、顧阿瑛、陸仁等をはじめとする多くの文人達が訪れた。16 世紀呉派文人画の中心人物である文徵明は、数ある蘇州の名勝の中でもとりわけこの石湖を愛し、それは石湖に関する詩文や絵画作品の制作数の多さからもうかがえる。

文徵明の石湖図は、嘉靖 11 年（1532 年）、62 歳の時の作である《石湖清勝図巻》（上海博物館蔵）が、嘉靖 2 年（1523）から 3 年間にわたる北京任官後、文徵明が本格的に書画活動をはじめた 1530 年代の優品として夙に知られる。しかしながら文徵明は、正徳 15 年（1520）、50 歳の作《石湖花游曲詩画卷》（上海博物館蔵）において、既に石湖の景観を絵画化していた。本発表は、現存する文徵明の石湖図のうち最も早い作例となる《石湖花游曲詩画卷》について、その制作背景と表現上の特色を考察する。本作品は、文徵明の石湖に対するイメージの一端を明らかにするのみならず、12 年後に制作される《石湖清勝図巻》にまで通じる、文徵明の石湖図が有していた普遍的な意味をも明らかにする手がかりとなると考える。

《石湖花游曲詩画卷》（紙本淡彩、縦 26.2cm×横 41.0cm）は、画の後に文徵明による書が合装された、書画合装巻となっている。書は正徳 9 年（1514）、文徵明が友人の王守、王寵、湯珍とともに石湖で遊んだ際に制作されたものであり、内容は元の至正 8 年（1348）3 月 10 日に、楊維禎、顧阿瑛等が石湖にて遊んだ際に詠んだ「石湖花游曲」を書いている。また詩文の冒頭には、楊維禎一行が石湖畔の山頂の寶積寺に登り、下山する途中、同伴した妓女のために「石湖花游曲」を詠んだというエピソードが記されている。興味深いことに、文徵明は、彼らの詩の末尾に自作の詩を次韻するという特殊なかたちで本書を完成させている。そして 6 年後の 1520 年、王守の頼みを受けて画を制作し、書画合装としたが、画は、高い視点から石湖周辺を見下ろす構図となっている。特に湖畔の連山の景物が詳細に描きこまれ、画面下には、橋の上で遊ぶ文人達の姿もみられる。こうした絵画表現には、1348 年の楊維禎らの石湖での雅会におけるエピソードや、「石湖花游曲」の内容が意識されていると考えられるが、同時にかつての自分達の石湖での雅会をも想起させるものであったと考えられる。

このように、同じ石湖という場を通して、時間を越えて二つの雅会が交錯し合う本作品は、文徵明が自身を過去のどのような文人達の系譜に位置づけようとしていたかを物語るものであるともいえるだろう。